

古墳壁画の保存活用に関する検討会（第16回）議事要旨

1. 日時 平成27年1月7日（水）10：30～12：45
2. 場所 三田共用会議所第4特別会議室
3. 出席者 （委員）

和田座長，梶谷副座長，泉委員，大石委員，小槻委員，黒崎委員，小林委員，佐藤委員，里中委員，佐野委員，染川委員，高鳥委員，成瀬委員，鉾井委員，三浦委員，三村委員，宮下委員，森川委員，矢島委員，柳澤委員
(事務局)

文化庁：有松文化庁次長，山下文化財部長，齊藤文化財鑑査官，早川美術学芸課長・古墳壁画室長，高橋記念物課長・古墳壁画室サブリーダー，渡辺美術学芸課長補佐・古墳壁画室長補佐，川島記念物課長補佐，建石古墳壁面对策調査官，内田文化財調査官，林文化財調査官，宇田川文化財調査官，横須賀文化財調査官 ほか

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所：田中副所長，島崎研究支援推進部長，岡田保存修復科学センター長，川野邊文化遺産国際協力センター長，木川保存修復科学センター生物科学研究室長，佐野保存修復科学センター保存科学研究室長，北野保存修復科学センター伝統技術研究室長，早川保存修復科学センター分析科学研究室長，吉田主任研究員，犬塚主任研究員，早川主任研究員 ほか

奈良文化財研究所：小野副所長，上田研究支援推進部長，玉田都城発掘調査部副部長，田中研究支援推進部連携推進課長，平澤文化遺産部景観研究室長，高妻埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長，石橋飛鳥資料館学芸室長，中島文化遺産部主任研究員 ほか

4. 概要

(1) 開会

(2) 委員及び出席者紹介

(3) 議事

①座長及び副座長の選任

座長に和田委員，副座長に梶谷委員が選任された。

②高松塚古墳及びキトラ古墳の保存活用について

- ・渡辺補佐から資料5に基づき，高松塚古墳の保存管理の経緯と壁画修理後の当分の間の保存の在り方について説明があり，次のとおり意見交換が行われた。

黒崎委員：考古学の観点から，遺跡は現地で保存することが原則と考えている。本検討会でも現地で保存するという原則はあるが，いろいろな条件で難しいと結論づけたことも重々承知している。説明のあった当分の間の保存の在り方では「当分の間」ということが何回か出てきている。戻すための技術が開発される，あるいはそれが見つかるまでは戻さないということだが，今期の委員の任期である2年の間に現地に戻すということは検討しなくてもよいのか。現地に戻すということは置いておいて，現地に戻さずに違うところで見せる方法や，現地の墳丘をどういう形にするのかということ任期中に十分検討す

るといふことなのかを教えて欲しい。何回も「恒久保存方針に基づき墳丘に戻すための検討を続ける必要がある」との記述があるため、その方向は失わず、現地に戻すという大原則に向けての検討に加わりたいと考えている。

建石調査官：今期の検討会においては、当分の間の墳丘と施設の扱いについて方向性をお示しいただくことを来年度までの一番主要なテーマとして考えている。その中で、必要に応じて例えば研究の進展があったとき等に現地に戻すということに関して議論いただくことは当然と考えている。

- ・岡田センター長から資料6に基づき平成26年度に実施している高松塚古墳壁画の保存展示の在り方に関する調査について、平澤室長から資料7に基づき高松塚古墳の墳丘整備に関する調査について説明があり、次のとおり意見交換が行われた。

染川委員：岡田センター長からは、展示のアイデアを保存科学的に可能かどうか研究するという風に説明されたものと受け取ったが、そのアイデアはどこで考えられるのか。保存できるかどうかではなく、一般の方がそのミュージアムに来たときに、分かりやすく楽しめるための展示のアイデアはどこが考えるのか。

岡田センター長：来年度に文化庁が主体となって、展示のアイデアを考えていくということになる。東京文化財研究所が現在行っている基礎調査では、いろいろなアイデアが出てくると思われるが、それに関して、保存科学的に、文化財科学的に対応できるかどうかということをしつかりと考えておく必要があり、その準備をしている。

建石調査官：補足すると、具体的なアイデア、方向性についてはこの検討会の中で議論いただくことになる。ただ、白紙の状態で議論することは難しいので、文化庁や東京文化財研究所でいくつかの案を出し、その中であるいはそれ以外のことも含めて議論いただき、最終的にアイデアが絞られていくものと考えている。

染川委員：その検討は来年度何回か行われるのか。

建石調査官：1回や2回ではない数回の会議になると思われる。

佐藤委員：参考事例として、韓国はもちろんであるが、特に中国、北朝鮮に係る世界遺産になっている高句麗壁画古墳についての公開・展示の在り方、保存の在り方をぜひチェックしてもらいたい。個人的に、高句麗の一時期、都があった中国の集安の壁画古墳を見に行ったことがあるが、古墳内部にカメラが設置されていて、隣の展示施設で操作することによってリアルタイムで画像を360度見られ、拡大することもできる。あるいは、壁画はないが韓国の武寧王陵や、限定的に年1回か2回公開して、現状そんなに悪くなっていないと言われている茨城県の虎塚古墳なども検討対象に加えてもらいたい。

柳澤委員：高松塚古墳壁画の修理は平成19年から行われているが、その成果を公式な形では公表されていないと思う。報告書の発行の目途はどうか。

建石調査官：原稿の大半は集まっており、できるだけ早く出版できるようにしたいと思っている。

和田座長：平澤室長から説明のあった部分に関連し、資料4の前の議事要旨の中で、史跡の範囲の問題や、どのように今後活用したいかという意見が入っているので、委員にはぜひ読んでいただきたい。また、墳丘の整備の在り方を考える場合、陵山里古墳の現在の復元された墳丘ではなく、戦前に初めて調査された時の墳丘の写真や図が残っていると思うので、それを参考に検討することもよいのではないか。

- ・川野邊センター長から資料8-1に基づき高松塚古墳壁画及びキトラ古墳壁画の修理について、高妻室長から資料8-2に基づき高松塚古墳壁画及びキトラ古墳壁画の材料調査について、木川室長から資料8-3に基づき高松塚古墳壁画及びキトラ古墳壁画の生物調査について、玉田副部長から資料8-4に基づきキトラ古墳の考古学的調査について説明が

あり、次のとおり意見交換が行われた。

成瀬委員：X線回折装置も導入されるということで、保存のためにも使われている材料をしっかりと把握する必要があるので大変よいことであり、成果を楽しみにしている。前回の検討会において、西壁女子群像のひだのところ、青いところに赤色の有機色料があるのではないかと言われ、その後日本文化材科学会でもう少し踏み込んでエンジではないかという報告があった。示された分光曲線などを見るとそのようなものが使われていると思われる。そうであると鉱物性顔料に比べて弱いので、例えばUV照射にしても次亜塩素酸ナトリウムを使う処理にしても、将来の展示に際して常にそれが周囲の環境からどのぐらいの影響を受けるかということ調べておく必要がある。

梶谷副座長：特に色については先ほど生物被害の説明にあったような情報の一元管理を行ってほしい。今まで様々な形で色の検査をいろいろな場所でされてきているが、情報がバラバラで、聞く方も混乱しがちなので、分かりやすい形で示されるようなことがあればよいと思う。

建石調査官：来年度整理して報告したい。

柳澤委員：かねてから仮設修理施設でたびたび生物被害としてムカデの発生という報告があったが、その後の対策、進捗はどうか。

建石調査官：一般公開中にムカデが壁画の周りに出てきたということもあり、委員や報道機関の皆様にご心配おかけした。今のところ実害はないが、ようやく今年度になってムカデの入室動線がほぼ特定できた。想像もしていなかったところから入り、多足類の生態を専門にされている先生や防虫の業者等の指導も得ながら進めている。ただ、外側の環境が森の中のようなところのため、引き続きキトラ古墳壁画の保存管理施設と同様に注意を払って参りたい。

黒崎委員：今回初めて参加したので既に検討済みであれば申し訳ないが、石材について調査検討の項目がないような気がする。石室を現地に戻せない一つの理由として、石材には多くの亀裂があり、それで強度が低くなっているのだということが書かれている。その石材、凝灰岩の強度を増す、戻すということについての調査なり工夫、検討はされているのか。

建石調査官：高松塚古墳もキトラ古墳も二上山の凝灰岩を使っており、非常にもろい石材である。特に高松塚古墳ではそれが壁画と一体として古墳の外に出ているということで、石材の保存だけを単独で扱えない、壁画と一体としてということである。いろいろ難しい課題がある。現在、石材の修理を行う班で具体的にどのようにするかということ議論しているが、折々に検討会にも諮りながら進めていきたい。

- ・内田調査官から資料9-1に基づきキトラ古墳の墳丘整備について、宇田川調査官から資料9-2に基づきキトラ古墳壁画の体験学習館での保存活用について説明があり、次のとおり意見交換が行われた。

佐藤委員：石材や壁画が脆弱で、2013年になってもカビが増えていなくとも発生しているというような報告があり、調査はこれからも継続していく必要があると改めて実感した。そういう意味では体験学習館の地上1階にできるスペースというのは、単なる展示だけではなくて、保存のための調査や研究もこれからも続けていくような機能があるべきだと以前から思っていた。たとえば学芸室が14平米しかなく、下の展示学習室とリンクして調査機能のようなものを展開してもらえれば差し支えないと思うが、日本における驚くような保存科学の最先端の調査や、様々な壁画保存のための努力をしてきたし、これからはしていくということ、展示の場でも発信してもらいたいと思う。

和田座長：継続的な壁画の研究も、保存技術等の研究も非常に重要なことであるが、建物の整備も進んでおり、一つの建物の中で実現するという事は難しいと思う

ので、高松塚とペアとして研究を進め、情報を発信していくということが課題になると思われる。

小林委員：体験学習館ということなので、この中で体験する、学習するというワクワクするような体験だったり、古代のロマンを感じたり、先ほど佐藤委員からあった保存に関わる様々な人々の努力というものを体感するようなものが組み込まれていると漠然と想像していたが、そのような計画や企画はあるのか。

建石調査官：資料9-2は壁画や出土品が入る、文化財の展示を含めた保存施設の部分であるが、下の階には今までの保存の経緯などを体験してもらい、最終的に上の階で実物を見るという一番重要な体験をしてもらうことを目指している。その下の階については国土交通省で様々な計画がなされている。

大石委員：国土交通省が国営公園の事業として、全体としては体験学習館という名で、1階は壁画そのものを展示・保管するスペースとして、地下はそれを見ていただく前に学習していただく、体感していただくというスペースとして建物を設計し、現在は展示の設計を詰めている。展示の設計については、国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所が、文化庁や奈良文化財研究所と協力して検討を進めている。

小林委員：体験や教育などの観点の施設と、文化財を展示・管理するような施設を分離しがちであり、そこで担当が違うということを知って少々衝撃を感じた。いらっしゃるお客様からすると、全く違うところが管理していることがわからないような有機的なつながり、体験のつながりを目指して欲しい。

黒崎委員：墳丘の整備について、カラーの平面図が付いているが、見学者がどこまで立ち入れるのか。図を見ていると下の道路から本当に遠いところの小さな古墳を見上げるだけのような感じがする。墳丘の上に乗るということはお墓なので決してよろしくないが、その両側に比較的平坦地があって、その中に墳丘を持っているというのはこの古墳の特徴であると思う。そこまで人が上がっていきけるということは配慮されているのか。

内田調査官：墳丘そのものは非常に急斜面のところ立地しており、墳丘のすぐ下側、園路までの間もかなり補強盛土をしないといけないぐらいの勾配になっているので、実際問題、上がっていくのは非常に困難ではないか。園路沿いのところは比較的緩い勾配のところがあるが、墳丘近く及び墳丘から南東側、南西側に斜面を復元するため、上るということは想定していない。

黒崎委員：地形のこともあるかもしれないが、見学者としては一步でも近づきたいという思いがあるので、少し工夫することを考えてもらいたい。

和田座長：来年度に入ったら、現地に行って、いろいろ見ることは計画されているのか。

早川課長：検討する。

- ・渡辺補佐から資料10に基づき国宝高松塚古墳壁画修理作業室の公開（第12回）について、川島補佐から資料11に基づき特別展「キトラ古墳壁画」について報告があった。

(3) その他

事務局から平成26年度の検討会は今回のみであること、平成27年度の検討会は日程調整の上、連絡するとの説明があった。

(4) 閉会

以上